

建築写真における人が居る場面に関する研究

鈴木ゼミ

17-1-191-0035

谷口 瑞歩

1. 研究の背景・目的

建築家と写真家は作品表現を通じて深く関わり合ってきた。竣工写真をはじめ建築の写真に人がいないことがしばしば指摘されてきたが、近年は人が登場する写真が増加している(写真 1)。本研究は、建築写真における「人が居る場面」及び建築家が写真に求めてきたことの変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法・対象

建築写真に関して以下の4つの作業を行った。

- 1) 建築写真に関する文献調査
- 2) 雑誌『新建築』(以下『新建築』)の表紙写真の分析(1925年8月創刊号～2020年12月号)
- 3) 人の入った建築写真に関するインタビュー(建築雑誌編集者, 作品写真に人を意図的に入れている設計者, 人入りの建築写真が得意な写真家)(表 1)
- 4) 人の入った建築写真の 카테고리 分析

3. 建築写真に関する文献調査

竣工写真とは工事の一環であり、記録を目的とすることから人を写さないことが一般的である。また建築写真に人を写すことは実務的な手間がかかることや、人が映り込むことを嫌う建築家がいることから避けられてきた。しかし近年、磯崎新(2020)は「人間の入っていないのはお見合い写真」だと人が居る場面を否定しない動きが見られ、建築家の建築写真への姿勢が変わりつつある。

4. 『新建築』の表紙写真の分析

初めて人が写った『新建築』表紙写真は1927年11月号である。1973～1996年まで表紙デザインを亀倉雄策が担当し、その方針から長く人が居る表紙は少なかったが、2000年以降増えており、2015年を境に半数以上の号の表紙に人が写っている(図 1)。

5. インタビュー調査からの分析

(1) 自然な場面と作られた場面

建築写真ではこれまで模型同様に添景として人が導入されることが多かったが、「リアルな生活感」と「かっこいい添景」の2つがあるとU氏は推測する。人を配置することで作られた「演技」による場面ではなく、自然な場面を求める設計者が増えている(図 2)。また生徒が居ることが自然な学校を建築家が設計することが増え、さらに人を入れた写真を得意とする建築写真家の登場など、2000年前後から建築写真において日常的で自然に人が居る場面が広がってきた(写真 2)。

表 1 インタビュー対象者

氏名	職業
O氏	写真家/編集者
A氏	建築家
Y氏	建築家
U氏	ゼネコン設計/広報
H氏	建築家
I氏/S氏	ユニット建築家
Yo氏	建築写真家



写真 1 高田東中学校/SALHAUS (吉田誠撮影, 2016)

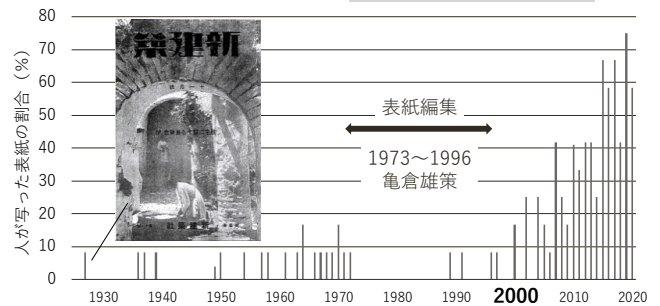


図 1 『新建築』における人が居る場面の経年変化

[U氏] 2種類あると思っています。一つは山本さんみたいに汚い生活感、リアルな生活感を出す。もう一つが妹島さんとかみたいに、もう全身黒服のかっこいい添景として人入れるやつになんか分かれている気がして。 [A氏] サクラでやるのがすごく嫌で。それは何かこう、やっぱあざといなって感じがあって。基本的には人を演技してもらってそこに入ってもらっているのは嫌なんですよね。 [Yo氏] 写真は当然スチールなんで静止画っていうことになりましても、その中に動きとか建築の周りがあるものをなんとか自分は写し込みたいっていうか。

図 2 場面における人の扱いについての発言



写真 2 吉田誠による自然な場面

[A氏] 人が居る状況まで写したいなと。その方がそこで考えていた空気が伝わるんじゃないかなと思うようになったのね、最近。 [Y氏] 建築はやっぱりなんか、人間との関係の中で設計をしようと思ってるので。当然人が入ってくれないと困るなって思っているという、まあそれくらいの理由なんですけど。 [H氏] 理想的にはやっぱり、建物の設計というよりはアクティビティをどうデザインしたかっていうのが伝わるっていうのはひとつ理想形だと思いますね、写真の。 [I氏/S氏] I氏:C+Aの「アクティビティを設計する」っていう思想だったり建築家としてもすごい身近にあって - S氏:アクティビティ・ネイティブ世代かもしれないですね。

図 3 人が居る写真で表現したいものについての発言

(2) 建築を取り巻くものの表現

人が居る場面によって表現しようとするものとして、「空気」「人間との関係」「アクティビティ」などの言葉が挙げられる(図 3)。いずれも建築そのものの形態ではなく、設計意図としての人の活動や周辺での出来事であり、建築を取り巻くものの価値が建築家・写真家に共有されてきたことが分かる。

また 1980 年代生まれの建築家を中心にデザインに当たってアクティビティを考慮することは当然であるという設計教育の背景が見られ、S 氏は自らを「アクティビティ・ネイティブ世代」と表現する。

6. 人の入った建築写真へのアンケート調査からの分析

(1) 人の扱い方から見た場面

場面での人の扱い方に着目すると、自然な場面と作られた場面として「日常」「雑踏」「賑わい」「モデル」「添景」の 5 つを想定し、学生 278 名に写真 16 枚について適切な分類を選ぶアンケートを実施した(図 4)。その結果全ての写真において約 4 割以上の回答が集中する項目があり、一般に人の扱い方や場面の違いが認識されていることが分かる(写真 3)。

(2) 場面の包含関係

アンケートの結果をもとに場面のカテゴリーの包含関係を示す(図 5)。「添景」「モデル」といった作られた場面にに対し、「日常」「雑踏」「賑わい」など自然な場面は区別されていると言える。

7. 人が居る場面の変遷

建築を取り巻くものを設計するという考えは、小嶋一浩の『アクティビティを設計せよ!』(2000)などに見られる。さらにシェアハウスなどの登場、人の振る舞いが設計対象となったことが建築写真の変化に関係していると言える。このような設計概念は 1990 年後半~2000 年頃を中心に展開された(図 6)。また使用状況の写真が賞で求められるなど社会的にも需要が高まり、人が居る場面が受け入れられている。

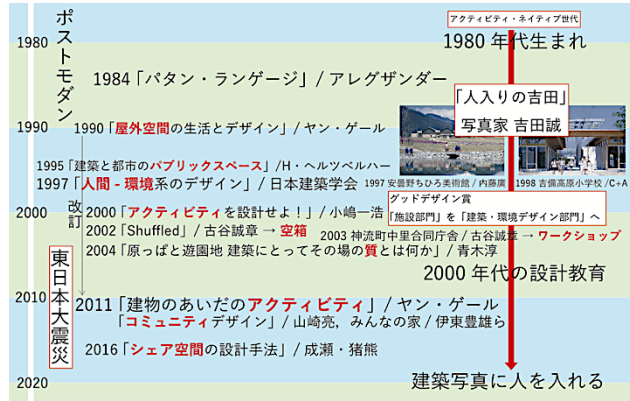


図 6 人が居る場面の変遷

この写真の中の人を表現するのに一番適切と思う言葉はなんですか？
277 件の回答

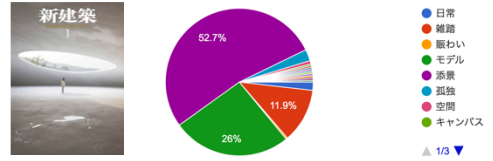


図 4 人の居る写真のアンケート回答の例



写真 3

「日常」と「モデル」 図 5 人の居る場面の包含関係図

8. 結論

- ・保守的であった『新建築』表紙においても人の入った写真が 2000 年を境に増加が始まっている。
- ・建築家や写真家に建築の周りにあるものや人の振る舞い、日常的で自然な風景という価値が共有されてきた。
- ・自然で日常的な場面は添景やモデルといった作られた場面と区別して認識されている。
- ・2000 年前後から「空気」「場の質」「アクティビティ」「コミュニティデザイン」などの概念が広がり節目となるとともに、それらが人の入った建築写真に影響した可能性がある。

参考文献

「建築写真」をめぐる 15 の問い 日経アーキテクチュア 2006. 12. 11
 a+u/Arata Isozaki (磯崎新) 2020 年 8 月号, 新建築社, 2020. 7
 新建築 2010 年 9 月号, 新建築社, 2010. 8, pp. 37-47
 藤村龍至, TEAM ROUNDTABOUT: 1995 年以後 次世代の建築家の語る現代の都市と建築, エクスナレッジ, 2009
 H・ヘルツベルガー: 都市と建築のパブリックスペース, 鹿島出版会, 1995
 日本建築学会: 人間・環境系のデザイン, 彰国社, 1997
 小嶋一浩: アクティビティを設計せよ! 学校空間を軸にしたスタディ, 彰国社, 2000
 古谷誠章: Shuffled 古谷誠章の建築ノート, TOTO 出版, 2002
 青木淳: 原っぱと遊園地 建築にとってその場の質とは何か, 王国社, 2004
 J・ゲール: 建物のあいだのアクティビティ, 鹿島出版会, 2011
 猪熊純, 成瀬友梨: シェア空間の設計手法, 学芸出版社, 2016